個人研究

近代日本の寺町における持続と変容

——歴史地理学の立場から——

山　田　　誠

1．問題の所在と本稿の課題

日本の都市の多く，とりわけ都市形成の時期が明治以前にまでさかのぼるものの大部分において寺院の集中する地区が見られることは，よく知られている。そして，それらの地区が寺町と呼ばれていることについても，それが公式の地名として用いられているか否かはともかく，周知の事実といえよう。

寺町についての学問的な言及の嚆矢は，歴史学者（本来の専門は西洋史学）の大類　伸による日本の城についての書物[1]の中の記述と思われる。大類は，この書物の第4章「寺院と城郭」において，両者の関係を西洋の事例をもふまえて論じた上で，第6章「江戸時代の城下」においても，「社寺の利用」・「社寺配置の実例」の2つの節を設けて詳しく論述している。「社寺の利用」の節では，まず城下防衛のために社寺（多くは寺院）が配置されたことを述べ，その上で配置の在り方を，1）城下の外の，城郭にとって最も危険な方面に配置する，2）城郭付近の枢要な地点に配置する，3）城下の通路の要所，とくに城下の出口に配置する，4）城下の周辺に沿って寺院を並列して城下の外防御線とする，の4タイプに分類し，次いで「社寺配置の実例」において，各タイプに属する全国の主要城下町をあげている。その後，小野晃嗣も日本の近世城下町における計画的寺院配置についてふれ，集団的（高田・米沢・秋田・弘前）と散在的（仙台・姫路・熊本・会津若松）の違いはあるにせよ，いずれも寺院のもつ軍事的意義を考慮したものとした[2]。また豊田　武は，寺町形成の要因として先行説を踏襲してその軍事的意義をあげるとともに，寺院が俗的領主の下に屈服したことの現れとの指摘をも行っている[3]。さらに原田伴彦は，いわゆる三都の事例を中心とし，さらに若干の城下町の事例をも含めて，日本近世都市の寺町についての総括的な論述を行っている[4]。以上の歴史学畑の一連の研究により，寺町が，幕府および諸藩による計画的都市形成の際に，城下町等の外縁部の守りを固めることを目的として造成されたとの通説的理解が確立したといえるであろう。

一方地理学の分野においても，寺町は城下町の歴史地理についてふれた多くの論稿において

必ず取り上げられてきた。古くは小葉田亮が旧城下町において緑地景観を維持させるものとして寺院の存在を評価する一方で，それとは逆の意味をもつものとして寺院敷地内における墓地の存在をあげ，名古屋などいくつかの都市において進行中であった郊外への公共墓地の設置を意義あるものとして注目している[5]。つぎに佐藤甚次郎は，戦後10年あまりの時期に書かれた日本の近世都市の歴史地理に関する概説の中で，近世城下町における寺院の配列について，上掲大類の分類をも参考にして類型化し，それぞれの類型に含まれる都市を例示するとともに，８つの城下町における寺院の分布図をも提示した[6]。また近年では中西和子が，江戸時代初頭の時点で幕府が諸大名に提出させた『正保城絵図』において，寺院の記載様式が統一されていないことなどを根拠として，寺町建設が城下町の防御のために行われたとする通説に対して疑問を呈している[7]。このほか地理学分野からの寺町研究で複数の研究者の関心を集めているテーマとしては，寺町の一部あるいはその隣接地が遊興・歓楽地区へと変わっていったプロセスを跡づけようとするものがある。山近博義による京都の寺町・新京極に関する研究[8]，山田朋子による名古屋の大須に関する研究[9]などがその例である。これらの研究はいずれも寺町それ自身というよりは，寺院，より正確には寺院境内地の変質という点に，より本質的な関心があるように読みとれるが，実際に研究対象とされているのがほとんど寺町の中に含まれる寺院の境内である以上，山近や山田の研究を，歴史地理学の立場からの寺町研究の事例として位置づけることは可能であると考える[10]。

寺町は，建築史学など工学系研究者によっても研究されている。福井城下町を対象として江戸時代における寺院配置の変化を詳細に跡づけた河端しのぶらの研究[11]は，その一例である。工学系，すなわち建築史学・都市計画学などの分野における寺町研究にみられる大きな特徴は，寺町が明治以降今日に至るまでにどのような変貌をとげてきたかという点に注目する論稿がかなりの数積み重ねられていることであろう。若干の例をあげると，戸沼幸市を中心とする早稲田大学建築学科のメンバーによる一連の東京の寺町研究[12]や，佐藤圭二らによる名古屋の寺町に関する研究[13]がある。ただ管見の限りでは，これらはあくまでも個別の寺町を対象とする事例研究であり，全国の多数の寺町を同時に視野に入れたものとはいいがたいように思われる。そうした中にあって，野中勝利らが城下町における近代都市づくりに関する研究の一環として，昭和戦前期に都市計画区域の指定を受けた32の旧城下町において旧城郭と寺町がどのような用途地域に指定されたのかを通観している[14]のは注目に値する。さらに佐藤　滋は，城下町が明治以降どのような変化を遂げていったのかを，都市計画の面を主にして解明しようとした著書の中で，「結界としての寺町」という見方を提示している[15]。

本稿はこうした研究動向をふまえ，全国各地の歴史的都市にみられる寺町について，近代におけるその変化の程度の問題を中心として事例を紹介し，それらの事例を通じて，寺町の変化あるいは持続の要因についても考察を加えることをさしあたりの目的とする。筆者の長期的な研究課題は，日本の近代の都市における地域構造の形成・変容過程の再検討という点にあり，

寺町研究との関連では，その過程において寺町が果たした役割・意義を解明することを目指している。しかし，本稿ではその前段階，すなわち全国各地の寺町が明治以降どのような経過をたどって今日に至っているのかという点の事実確認とその意味の検討に止めざるを得ないのではないか，というのが現時点での見通しである。

なお上に掲げたいくつかの先行研究においては，管見の限りでは寺町の厳密な定義がなされているものは見当たらない[16]。この点について筆者は，「日本の歴史的都市における仏教寺院の集中地区」という定義が自明のこととされているのではないかと考える。問題は「どの程度の数の寺院が集中していれば寺町と見なすのか」という点である。しかし，この点について絶対的な基準を設定することは困難ないし不可能である。都市内に存在する寺院の数が100を越えるような大都市では，たとえ3～4カ寺程度の集積が見られたとしても，そこを寺町と呼ぶべきかについては議論が分かれるであろう。逆に都市内にある寺院の数が10程度にとどまるような小都市では，3～4カ寺程度の寺院の集積が見られれば，そこを寺町と呼ぶことに不都合はないのではないか。こうしたことから，以下においても寺町の有無を判断する場合に，集積する寺院の絶対的な数についてはとくに基準を設けることはしないでおく。むしろ，上に記した定義に対して，形成に当たっての計画性の条件を付加することが妥当ではないかと考える。つまり，本稿における筆者なりの寺町の定義は「日本の歴史的都市において計画的に形成された仏教寺院の集中地区」ということになる。この定義では1都市内部の寺院集中地区の数は不問としており，実際，1つの都市の中に複数の寺町が見られるケースは少なくない。この点に関しては，筆者は，すでに紹介した小野晃嗣の研究で「散在的」とされている仙台などについても，都市内部に複数の寺町が形成されたと見るべきではないかと考えている。

2．寺町の諸事例

本章では，日本各地の歴史的都市の中で寺町が顕著な形で形成されたところをいくつか取り上げ，個別に寺町の概況を紹介する。その際，前章でもふれた本稿の趣旨から，寺町の起源あるいは江戸時代における寺町の状況については必要最小限の記述に止め，明治維新以後太平洋戦争直後あたりまでの時期における寺町の状況の記述を中心としたい。なおここでとりあげる都市以外にも寺町が存在する事例は多くあるが，今回は本研究所からの助成を得た2010（平成22）年度に現地調査を行った都市を中心とし，さらにそれに先立つ数年間に現地を訪れる機会のあった都市についても付け加えて論じる。記述の順序はおおむね北から南へとする。なお，各地区についての記載を行うに当たっては，現地での観察結果に加えて，ゼンリン社その他の刊行する住宅地図や，各都市の市史類，地元研究者による史書類，寺院紹介を主目的とするような書物など，かなり多種多様な資料をも利用したが，それらのすべてをそれぞれの項目で注としてあげるのはかなり煩わしいので，以下では，主なもののみを記すこととする。また以下

では各地の寺町の現状が描かれた2.5万分の１地形図（尼崎のみは１万分の１地形図）を添えるが，2.5万分の１地形図の場合は，縮小表現上の制約から，すべての寺院について名称や記号が記されているわけではない点に留意することが必要である。

（１）弘前

城の西南方と南方の２カ所に寺町が現存する（図１）。

前者は現在の公称町名では西茂森１丁目と同２丁目のそれぞれ大部分を占め，最西端の長勝寺に至る道路の両側などにすべて曹洞宗の30余寺が完全に境内を接する形で立地している[17]。多くの寺院は藩政初期の慶長年間に起源を有し，廃寺となった跡地に新たな寺院が設置される例や，寺院の境内の一部に当該寺院が実質的に経営する保育園等が設置される例がみられるのを除けば，明治以降の変化も少ない。



図１　弘前の寺町
国土地理院発行2.5万分の１地形図「弘前」（1994年修正）より

一方後者は公称町名での新寺町の範囲とほぼ重なる。その名が示すように，もともと城の東側にあった寺町（現在は元寺町の町名となっている）が，1649（慶安２）年の火災を契機として集団移転した（一部は他地区から）ものであり，曹洞宗以外の諸宗派の寺院が混在する。明治維新時とそれ以後の時期に若干の変化がみられ，とくに東部の大円寺，慈雲院，報恩寺の境内での変化が著しかった。まず大円寺（真言宗）は明治初年に現在の南津軽郡大鰐町に移転し（同地に現存），その跡地に最勝院（真言宗）が置かれた。最勝院はそれまで城下町北部の八幡神社の境内にあったものが，神仏分離政策の遂行の過程でそこを出ることが求められたのである。ここの場合は同宗派の別の寺院に変わったもので，少なくとも地理学の立場からはそれほど大きな変化とはいえない。次に慈雲院（黄檗宗）については，明治期を通じてしだいに衰微し，その過程で大正初年に現在の黒石市の薬師寺と合併されて，新寺町の境内は完全に失われた。その跡地は県立弘前中学校の拡張のために利用され，今日の県立弘前高等学校に引き継がれて

いる。また報恩寺（天台宗）は，江戸時代中期からは藩主津軽家の菩提寺となり，塔頭６坊を有する境内は広大なものであった。明治以後，本坊は今日に至るまで維持されているが，塔頭の多くは失われ，その部分は一般の住宅地となっている。1935（昭和10）年刊行の『弘前市案内図』と題する住宅地図的な地図[18]には，その住宅地の箇所に「市営住宅」と記されているが，近代の弘前市について記されたいくつかの史書にも，この市営住宅の記事は見えず，建設の経緯等については不明である。また上記の弘前中学校（元寺町にあった校舎が1892（明治25）年の火災で焼失し，翌年にこの地に新築移転）建設時の用地も，直前こそ弘前市立小学校の学田であったとされている[19]が，明治以前には慈雲院の敷地の一部であったことは疑いない。

（２）秋田

城の西方から西南方にかけてほぼ南北方向に寺町が存在する（図２）。現在の町名では旭北寺町に含まれる部分が大きいが，他に旭北栄町，旭南１丁目，大町３～６丁目などの各一部にもまたがる。1886年の大火でほとんどの寺院が焼失したため，近世的景観は残っていないが，焼失した寺院のほとんどはほどなく再建され，寺町の構造は維持された。その寺院数は藩政期には塔頭も含めて約40カ寺，今日でも37カ寺を数える[20]。数の上ではほとんど変化がないが，無論，廃寺となったものや新たに立地した寺院も若干は存在している。宗派は分散している。

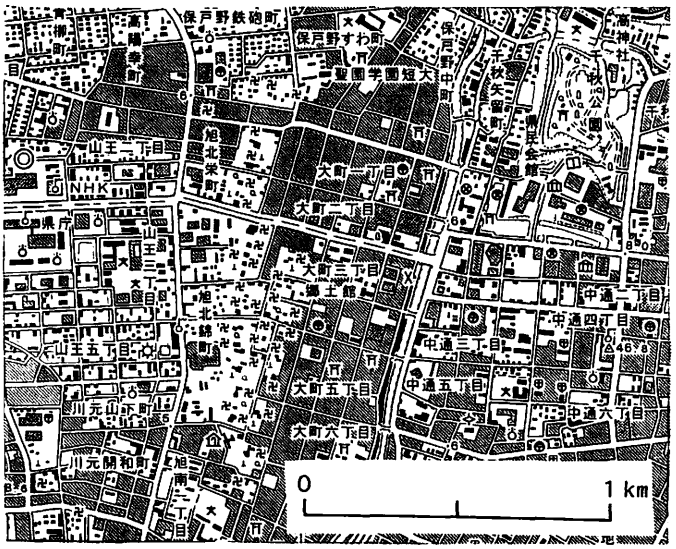

図２　秋田の寺町
国土地理院発行2.5万分の１地形図「秋田西部」（2006年更新）より

この寺町は，藩政期以来長年にわたって秋田の市街地と農村部を区切る役割を果たしていた。近代期を通じて，この寺町北部の裏手（西側）に遊郭が設けられていたことや，明治期から昭和初年にかけて南部の誓願寺の隣接地に隔離病棟（当時の用語では避病院）が設けられたり[21]，やはり戦前期に寺町最南端の応供寺の境内に，今日とは比較にならないほど閉鎖的な精神病棟が設置されたりした[22]ことなどは，秋田の寺町のそうした性格をよく示すものといえよう。

秋田の寺町の西側に広がっていた農地が他の目的に転用され始めるのは1930年代後半のことである。尋常小学校と高等小学校がほぼ同時に建設された。さらに戦後の1950年代後半になると，それまで旧城下町の士族屋敷地区にあった県庁庁舎が1957年の火災で焼失したことを受け

て，新庁舎建設用地をめぐっての議論が行われた。結局，当時の市街地の西限をなした寺町からさらに600メートルほど西の山王地区に建設されることとなり，1959年に完成した。1961年７月現在の『秋田市街図』[23]によると，この段階ですでに寺町の西側には各種の施設が建設されていて，寺町が市街地の西縁をなすという状況は失われていることが知られる。寺町を横断する道路も増えたり拡幅されたりしていて，2010年秋の現地調査時にも，寺町所在の寺院の敷地の一部を割いて東西方向の道路を新設する工事が進行中であった。

なお秋田の都市構造を歴史地理学的に考察した論文として，三浦鉄郎[24]や横尾　実[25]のものがある。三浦は近現代の寺町については，そこの寺院配置が近世からの「残象」[26]として存在したことを指摘するが，それ以外の記述はない。一方横尾は，近世から近現代の秋田の都市構造の変化を，1830（文政13／天保元）年ごろ，1880年ごろ，1952年，1990年という４つの時点の地域構造図に示すことによって明らかにしようと試みている。そこではそれぞれの年次について，秋田市街地内部に複数の「単位地区」を設定し，各地区の性格を類型化しているが，寺町地区はすべての年次について１つの「単位地区」とされ，その性格としては，1830年ごろについては「計画により他の地区に付随した地区」，1880年ごろと1952年については「他の地区との間に関係を持たない地区」，1990年については「他地区の成長を阻止した地区」とされている[27]。「成長を阻止」という表現が妥当であるかについては慎重な検討を要すると考えるが，現代においても秋田の寺町地区が，その東隣（既成市街地）・西隣（新興市街地）と景観面でも機能面でも明白に区別される存在であることは確かであろう。

（３）新潟

いうまでもなく新潟は港町であって城下町ではない。しかしそこには江戸時代前半期に明瞭な寺町が形成され，近代から今日までの間にかなりの変容をとげながらも，今日も20余の寺院が現存している（図３）。寺町の位置は，現在の町名では西堀通１番町から11番町，さらにその北に続く古町通12番町・13番町である。ただここの場合，もともとの寺院境内地の内，表の通り（1964年までは西堀と称する水路が通じていた）に面する部分のほとんどは，寺院の本来の用途以外の目的に利用されている。もともと水路を隔てた（現）西堀前通一帯が新潟の代表的な歓楽街であったことも影響してか，元の寺院境内の一部も飲食業を主とする複合ビルとなっているケースが多い。

この変化がいつごろから，どのように生じたかについては，先行研究や古地図類によりかなりの程度に明らかとなっている。ここで重要と考えられる点は，この寺町の中央部には江戸時代の早い時期から奉行所が置かれており，それとの関連で，奉行所の並びの寺町の表通りに面する箇所に，幕末期には10軒を越える「御役宅」が建てられていたことである[28]。明治維新以後，奉行所跡にはまず県庁，その焼失・移転後は区役所，1889年の市制施行後は市役所が設けられ，バブル期の1989年に寺町南西端からほど近い白山地区に新築移転するまでその状況は変

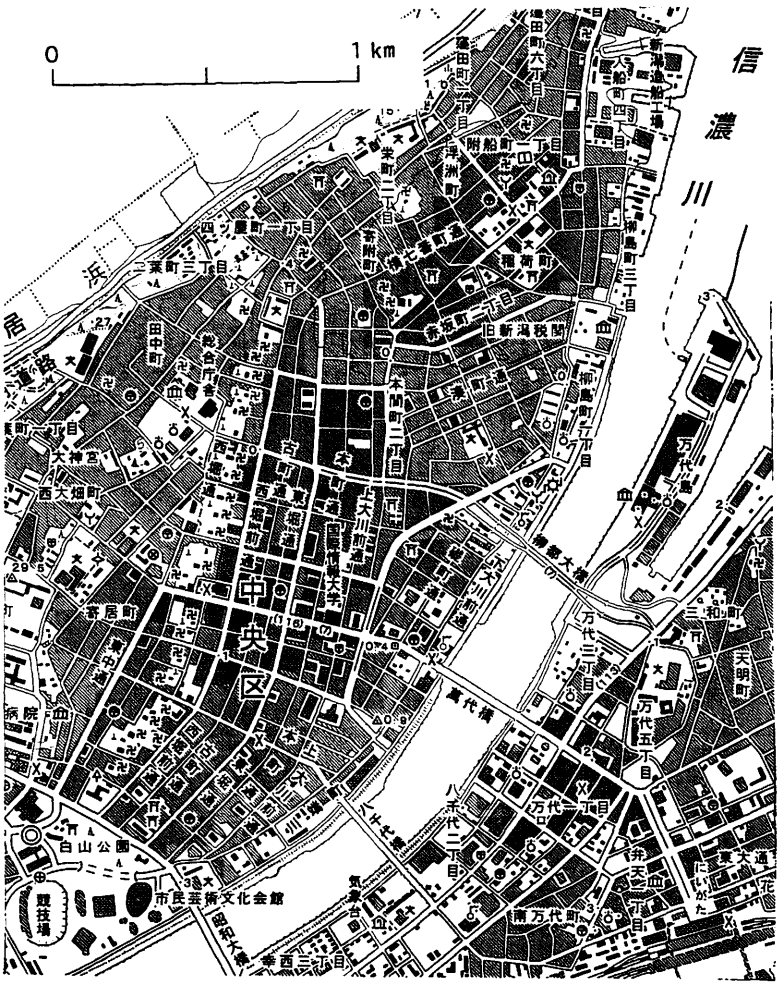

図3　新潟の寺町
国土地理院発行2.5万分の1地形図「新潟北部」(2007年更新）より

わらなかった。かつての「御役宅」用地の用途変更も早くから行われたようで，1880年にイタリア人ミオラによって開業した西洋料理店イタリヤ軒（現在のホテルイタリア軒の前身）も，そうした場所に立地したものである。また1896年発行の『新潟市商業家明細全図』[29]によると，すでにこの時期に寺町の表通りに面して，上記のイタリヤ軒に加えて，旅舎4軒，写真師，小間物店，代書屋，病院などが立地しており，ほかに公的機関として，市役所（上述），警察署，郵便電信局が奉行所跡地とその隣接地に，また小学校が北辺部に，それぞれ設けられていたことが確認できる。

新潟は幸いにも戦災を受けることが少なかったが，1955年に大火に見舞われ，そのため寺町の5カ寺が焼失した。その火災からの復興の過程で行われた区画整理事業との関係で，さらに3カ寺を含めて計8カ寺が元の位置からやや離れた所に再建された[30]。さらに，上述の市役所

の新築移転後，その跡地（寺町の中央部に相当する）で実施された再開発事業のために，１カ寺が郊外に移転している[31]。

以上をまとめると，新潟の寺町における境内地から他の用途への変化は，すでに近世期から生じていたのであり，明治以降に生じた変化は，武士の居住地区から商業・サービス業地区への土地利用変化を主とするものとしてとらえるのが適切と考える。

（４）高田（新潟県上越市）

城の西方に南北方向に寺町が存在する（図４）。ここは，城下町起源の都市の形態をよく示す事例として高等学校の地理の教科書にもしばしばその地形図が掲載されている。現在の公称地名でも「寺町１～３丁目」が採用され，それらの範囲はかつての寺町のそれとかなりの程度で重なる。近世の寺院数は130余，今日では66である[32]。現存する寺院の宗派は浄土真宗各派を合算すると36で他を圧し，その内訳は大谷派17，地元の浄興寺派10，本願寺派６，仏光寺派３となる。他には曹洞宗11，日蓮宗７，浄土宗６，真言宗５，時宗１がある。

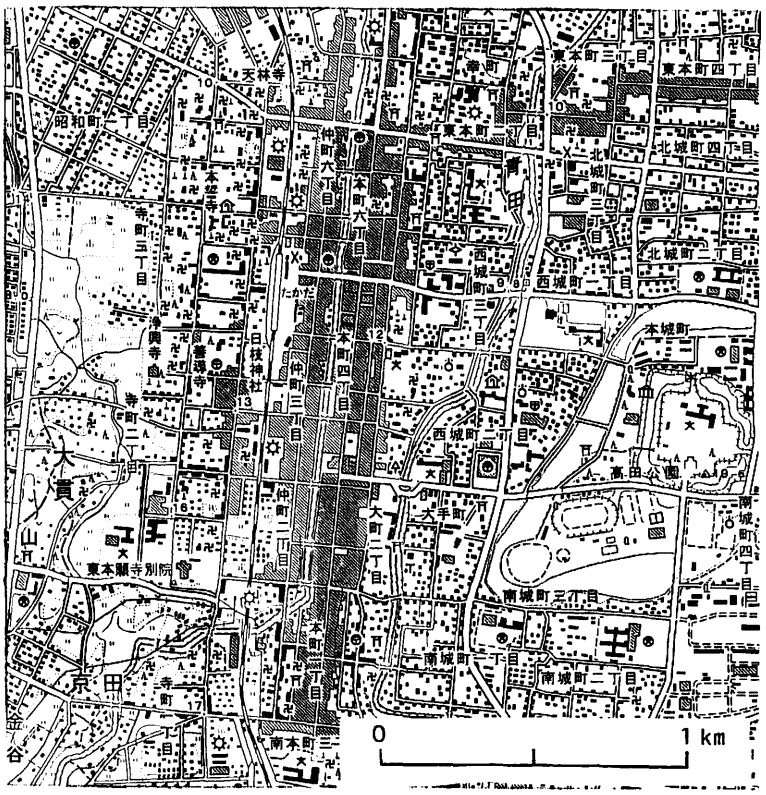

図４　高田（上越市）の寺町
国土地理院発行2.5万分の１地形図「高田西部」（2006年更新）より

高田には1886年に鉄道（現在の信越本線）が開通したが，その際，鉄道は城下町の中心部と寺町の間に寺町の方向と平行する形で建設された。高田駅の出入り口は当然，町の中心部に近い線路の東側に設けられた。こうしたことから高田の寺町はいわば駅裏地区となり，近代化の影響を受けることが比較的少なかった。現在でもかなりの部分で寺町が市街地の西縁をなしているが，北部の現寺町３丁目の一部では旧来の寺町のさらに西側に1970年代以後宅地造成が行われ，今日では住宅地となっているほか，さらにより西側での飛地的な市街化もみられる。

（5）富山

城の東南方にあたる梅沢町を中心として寺町が存在し（図5），ここについても新潟と同様，渋谷の研究がある[33]。渋谷も利用している1854（嘉永7／安政元）年の『越中富山御城下絵図』（富山県立図書館蔵）によれば，およそ40の寺院が境内を接しており，やや離れて立地する寺院をも含めれば約60カ寺がブロック状の寺町を形成していたことが読みとれる。1885年作成の『富山県上新川郡富山市街見取全図[34]』には，この付近に55の寺院が明示されているが，それらの内，現存するものは36，移転等によりなくなったものは19である。さらに，現存する寺院の場合でも境内の面積は減少しているケースが一般的である。そのため今日では，やや極端にいえば通常の住宅地の間に寺院が点在するような状況となり，寺町としての景観がやや失われかけている。この変化は，明治維新直後に全国的に行われた無住・無檀家寺院の廃止と，太平洋戦争末期の大規模空襲の2つの出来事を契機として生じたものであり[35]，とりわけ後者の影響が強かったようである。

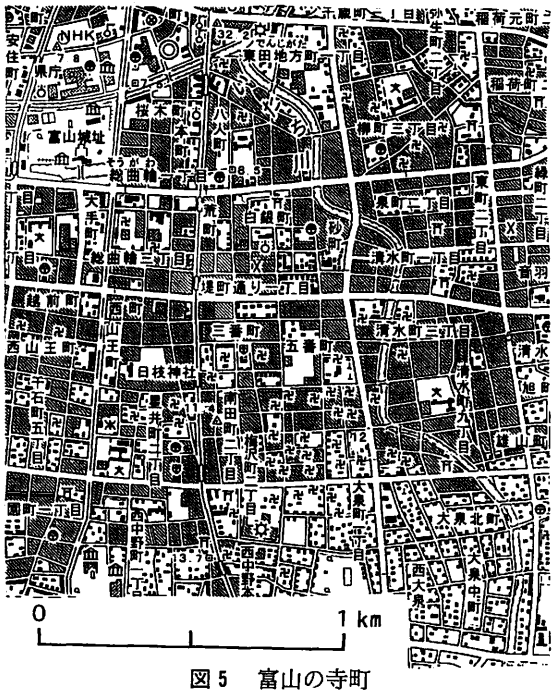

図5　富山の寺町
国土地理院発行2.5万分の1地形図「富山」（2006年更新）より

この寺町は，明治～昭和戦前期には富山市域の東南端を構成していたが，昭和初期になると，寺町の南方すなわち当時は郡部（上新川郡堀川村）であった地区にも都市化が進展した。とくに，富山市立高等女学校が市域外の堀川村に建設されていることが注目される。この村が富山市と合併するのは1942年のことで，これにより，寺町の縁辺的性格が少なくとも行政領域という点に関しては解消された。

（6）金沢

金沢の寺院集中地区は2カ所ある[36]（図6）。一つは城の東北方，浅野川を隔てた卯辰山の山麓から山腹にかけてで，東山寺院群とよばれる。ここには現在でも約50の寺院が集積しているが，複雑な地形のため他の寺院を見通すことが困難で，現地では寺町という印象をもつことが難しい。今一つは城の南々西方の寺町寺院群である。犀川大橋を渡ってすぐのあたりから始まり，現在の町名では「寺町1～5丁目」と「野町1丁目・3丁目」にまたがっている。寺院数は約70である。

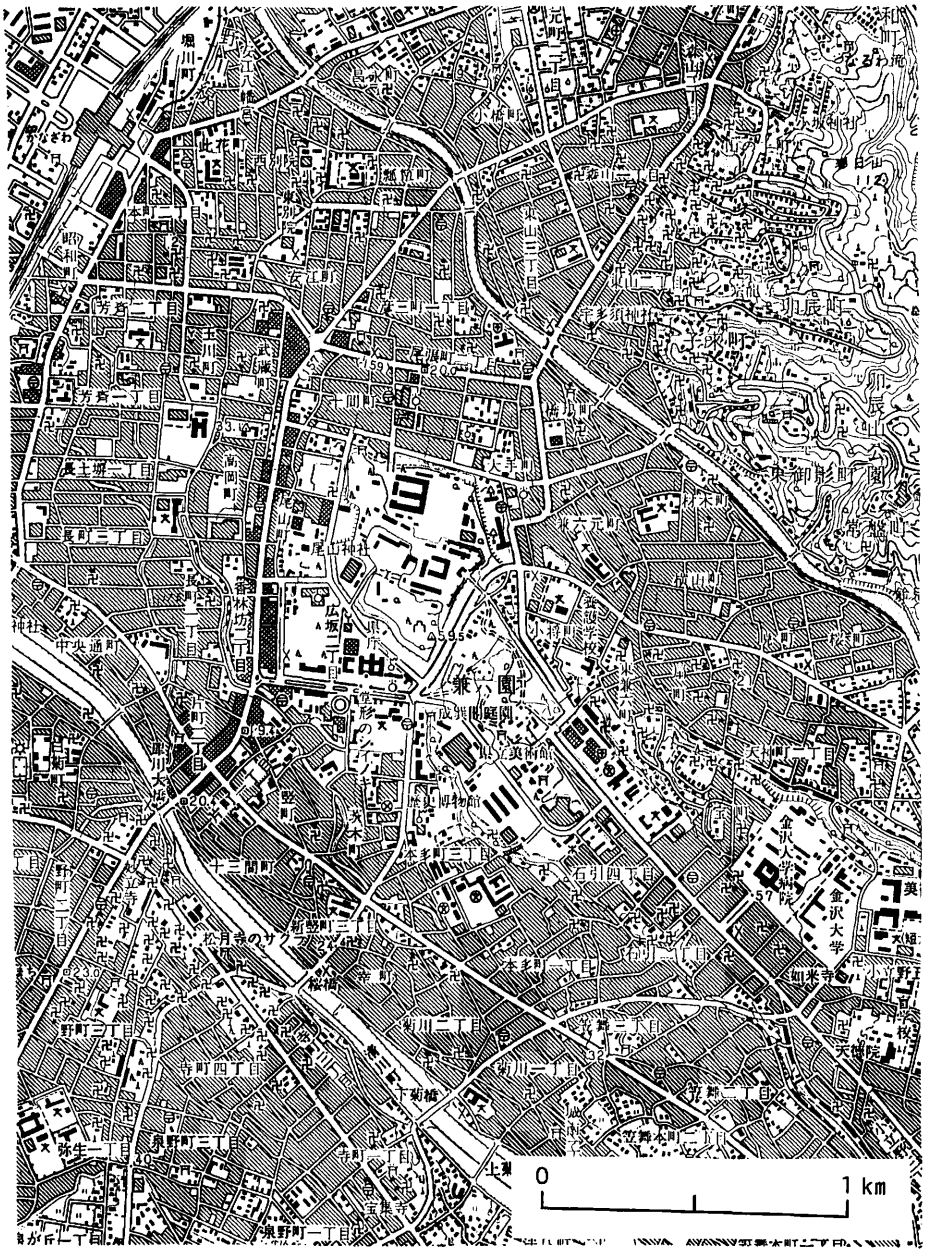

図6　金沢の寺町

日本地図センター発行「地図で見る金沢の変遷Ⅴ」(1994年ごろの2.5万分の1地形図を利用したもの) より

明治以後の変化としては，寺町1～5丁目を縦貫する道路の東南方の野村地区（現平和町）に1898年に陸軍の諸施設（各種の部隊の兵営や練兵場）が設けられたことから，1906年にその道路の拡幅が行われ[37]，さらに1921（大正10）年には都心とその地区とを結ぶ路面電車が開業したこと（1967年廃止）などがあげられる。そのため，付近の景観はかなり変わったと思われ

る。ただ，金沢の寺町については，近代期の状況を知りうる資料（とくに個別寺院を明示した大縮尺地図類）を利用することができなかったため，詳細な考察を行えないのは遺憾である。

なお，この寺町の内「野町１丁目」に含まれる14カ寺を対象として，境内地の変容についてアンケート調査を行った結果が，小坂謙介らによって公表されている[38]。明治中期以後，僧侶の妻帯が真宗以外でも一般化したことに伴って，庫裏の規模がしだいに大きくなった寺院が多いという指摘は興味深い。

（７）名古屋

大規模な城下町だけあって，寺院も各地に立地したが，その中で寺町と称すべきものとしては，城の東部（現在の東区東桜２丁目付近）と城下町の南部（大須地区。戦前期まではこの地区の北の白川地区まで寺院が展開していた）の２カ所がある（図７）が，ここでは後者について検討する。18世紀後半の状況を示すとされている『尾州名古屋御城下之図[39]』を近世の図の事例として用い，一方明治期のものとして『最新増補名古屋市及付近図[40]』を用いて両者の比較を行うと，後者にはすべての寺院の名称が記載されているわけではないために，一部不確実な部分もあるとはいえ，寺院が大幅に減少しているようには見えない。もちろんここでも，明治維新後の国家的宗教政策に基づく無住無檀家寺院の廃止が行われている[41]。また，佐藤・南谷によると，1918年から1938年までに大須地区から11の寺院が移転し，さらに戦時中に防空緑地を作る計画との関係で，大須地区の北に隣接する白川地区から10カ寺の移転が開始された[42]。戦後の戦災復興事業はこうした動きを加速させ，白川地区の寺院はその多くが移転し，跡地は米軍キャンプ，返還後は白川公園の用地とされた。これも佐藤・南谷の示すところでは，この時の寺院の移転先は，名古屋市内の東部の新興住宅地が多かった。それはおそらく，檀家の居住地分布の変化や，名古屋の戦災復興事業の一つの柱ともいうべき墓地の集団化事業の結

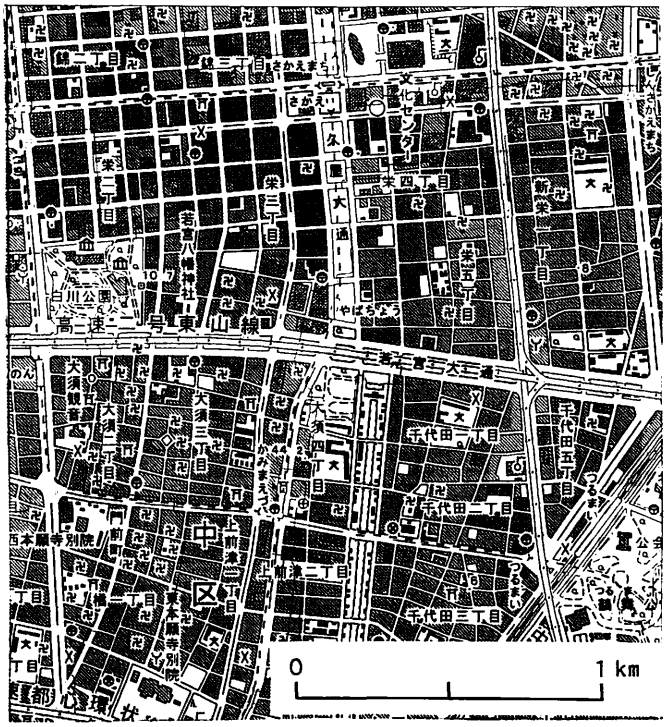

図７　名古屋の寺町
国土地理院発行2.5万分の１地形図「名古屋南部」（2004年更新）より

果として設けられた平和公園の位置と関係するものであろう。

大須地区は，かつては名古屋を代表する遊興の地であり，明治初期から大正後期にかけては寺町の西隣り一帯が公認の遊郭とされていたこともあった。1923年に遊郭が東海道線以西の中村地区に移転してからも，映画館や演芸場などの娯楽施設を中心とし，それに付随して飲食店や小売店が集中するという大須地区の基本的性格は大きくは変わらなかった。しかし，上述の戦災復興事業によって，都心の広小路地区と大須地区との間を分断するような形で広幅員道路（若宮大通）が新設されたことや，人々とりわけ若者の娯楽面での嗜好の変化などもあって，大須地区の繁栄は失われていった。

（8）京都

秀吉による大規模な京都の都市改造の際に，市街地北部の「寺之内」，それに鴨川西岸付近の「寺町」という2つの寺院集中地区が設けられた。この内，前者では明治以後もあまり大きな変化は認められないが，後者（図8）についてはすでに江戸時代後半からその一部が歓楽街化していた[43]。その点は名古屋の大須地区とも共通している。明治に入り，折からの廃仏毀釈の時代風潮の中で，1872年，寺町通の東の三条―四条間に，それと平行する通りとしての「新京極」が設けられた。これは，槇村正直（後に府知事）のイニシアチブによるものともいわれ，その目的は，東京遷都による京都の沈滞傾向を少しでも挽回することにあったとされている。この通りが設けられたことによって，三条―四条間においては，寺町通に面する寺院は皆無となった。

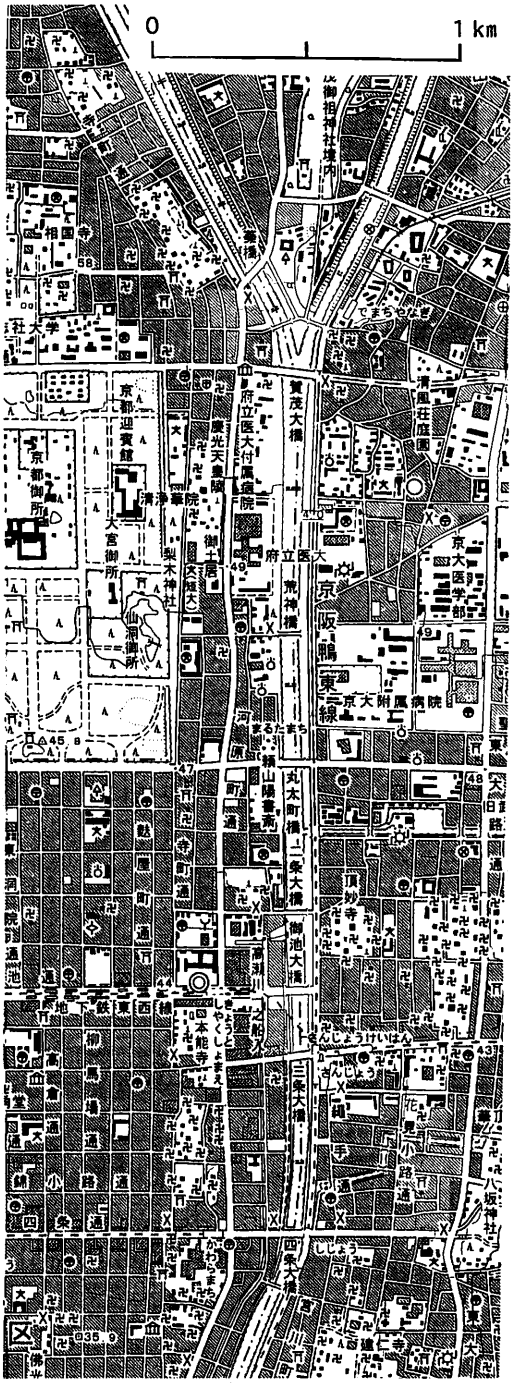

図8　京都の寺町
国土地理院発行2.5万分の1地形図「京都東北部」（2005年更新）より

表1　京都三条—四条間の新京極周辺における寺院の動向

	所在地		
	計	新京極に面する4町[1]	新京極に面しない2町[2]
明治維新時に存在した寺院	38	21	17
維新直後の約10年間になくなった寺院	4	4	0
1880年ごろから1915年ごろになくなった寺院	7	7[3]	0
1915年ごろから1980年ごろになくなった寺院	4	2	2[4]
1980年代以後になくなった寺院	2	0	2
現存する寺院	21	8	13

注：1）北から順に桜之町，中筋町，東側町，中之町
2）北部の松枝町と南部の裏寺町
3）これら7カ寺の個別事情は以下のとおりである。
・1883年に焼失を機に寺号を本寺に合併して廃
・1883年に京都の他地区へ移転
・1888年に寺号を本寺へ合併して廃
・1889年に寺号を本寺へ合併して廃
・1901年に市内他地区へ移転
・1909年に市内他地区へ移転
・1912年に市内他地区へ移転
4）内1カ寺は戦後少なくとも1949年までは存続していたことが，大蔵省管財局編『社寺境内地処分誌』大蔵財務協会，1954 により確認できる。

資料：主として碓井小三郎『京都坊目誌　下巻』（新修京都叢書刊行会編著『新修京都叢書 20』臨川書店，1970 所収）により，他に「角川日本地名大辞典」編纂委員会・竹内理三編『角川日本地名大辞典 26 京都府 上下』1982 その他を併用した。

新京極付近での幕末～明治初期の寺院の動向について知ることのできる資料として『京都坊目誌[44]』がある。今，本書の記載を主な資料として三条—四条間の寺院の存廃状況を整理すると表1のようになる。新京極に面することとなった寺院への影響が早くに現れたのは当然ではあるが，寺院の廃止・転出が必ずしも明治初期に急速に生じたわけではなく，明治中・後期にかけて徐々に進んでいった様子が読みとれる。一方，寺町の一角ではあるが新京極には面していない地区においては，明治期には寺院の減少はまったく見られず，むしろ第二次大戦後の廃止・転出が目につく。戦後のこの地区において寺院の移転が強制されるような都市計画事業が行われた事実はないので，ここで生じた寺院の廃止・転出は寺院自らの意志に基づくものと考えられる。

このように京都の寺町においては，近代以後の変化が三条—四条間でとりわけ著しいが，他の地区の中には旧態がかなりの程度に残存している所もある。三条通のすぐ北の天性寺，さらにその北の本能寺などはその例である。

なお図8には，鴨川の東の二条—三条間にも寺院の集積が認められる。もと寺町にあった寺院が1708（宝永5）年の火災の後に移転したことによって形成されたものである。

（9）大阪

大阪駅に近い曾根崎地区を西端として東西方向に伸びる寺町（天満寺町；図9），大阪城の南々東方向の塊状の寺町（城南寺町），それに城の南方の寺町（生玉寺町・中寺町・下寺町などの一帯）が存在する。ただし後二者（図10）は，最も近いところでは300メートル程度しか隔たっていないので，連続するものとみなすことも十分可能である。

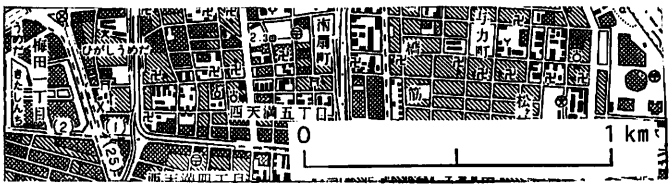

図9　大阪，天満寺町
国土地理院発行2.5万分の1地形図「大阪東北部」（2001年修正）より

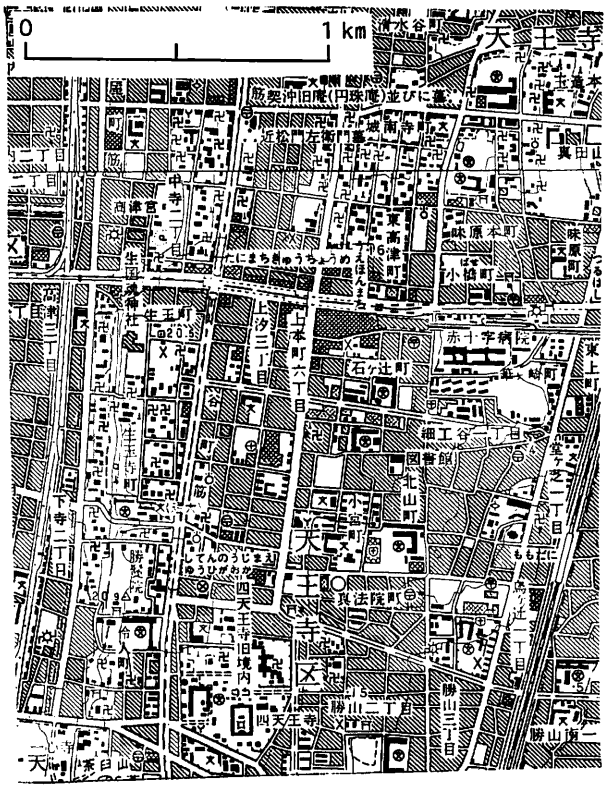

図10　大阪，城南から生玉地区にかけての寺町
国土地理院発行2.5万分の1地形図「大阪東北部」「大阪東南部」（ともに2001年修正）より

天満寺町は東西方向に走る道路の北側に1列に寺院が並ぶもので，それほどの規模のものではなく，江戸時代に30余り，1880年代にもほぼその数が維持され，現状では隣接地に立地するものを含めて24となっている。それに対して図10に示された地区については，そこに含まれる寺院の数がきわめて多いことが，まず指摘される。1657（明暦3）年刊の『新板大坂之図』では約150カ寺が数えられ，1806（文化3）年の『増補改正摂州大阪地図』では約200カ寺に達している[45]。明治以降については，1880年代の『大阪実測図』に約180カ寺が記載されていて，若干減少したことになる。なお現状では，この地区の寺院総数は180強であり，数だけについてみれば明治中期からまったく変化していない。

ここの寺町について昭和戦前期に書かれた紀行文に，ここが大阪市内では珍しいほどの緑豊かな地区であり，とりわけ大規模な寺院が立ち並ぶ地区を貴重なものとして高く評価しているものがある[46]。もちろん，道路の片側だけに寺院が見られるような地区では，道路を隔てて寺院の反対側にはいろいろな商家が立ち並んでいることがあり，また寺町の近くに料理屋・宿屋などが多くあることについても記されてはいるが，著者の筆致は，おおむねこの大阪の寺町に

対して暖かな感情を抱いているように読みとれる。

1960年代におけるこの地区の土地利用変化についての研究が，扇田　信らのグループによって行われている[47]。戦災復興の過程で，いくつかの寺院が本堂等の再建費用捻出の必要上敷地の一部を売却し，その結果，一帯が風致地区に指定されているにもかかわらず，それにふさわしくない土地利用が生じていることを指摘している。

（10）尼崎

工業都市あるいは大阪の衛星都市としてのイメージが先行する尼崎ではあるが，ここは戸田氏によって築かれた城下町であり，後に青山氏さらに松平氏に引き継がれて明治維新期に及んだ。石高は当初は５万石，後に若干減少して4.8万石となり，さらに４万石の時期が長かった。寺町は城の西方にほぼ東西方向で形成されていた（図11）。これまで取り上げてきた城下町と比べて，藩の石高が小さかったことから城下町も小規模で，寺町についても近世の寺院数は15程度と，それほど大規模ではなかった[48]。なお，ここの寺町には真宗寺院が見られないが，これは京都や大阪の寺町にも共通する特色とされている。

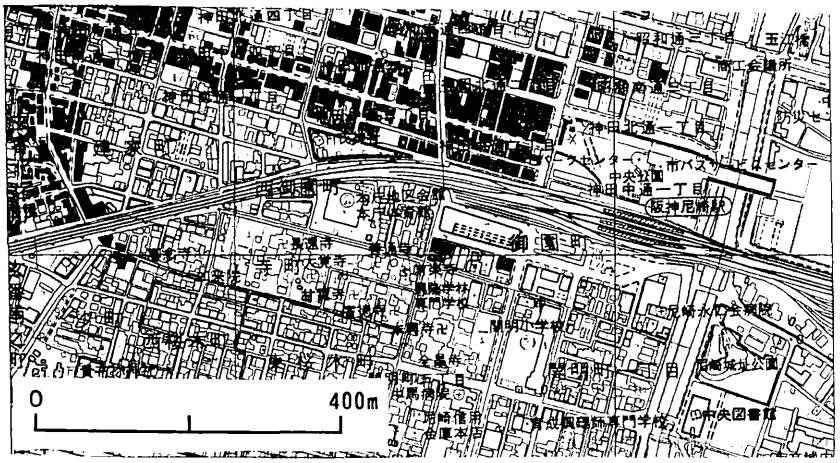

図11　尼崎の寺町
国土地理院発行１万分の１地形図「尼崎」（2000年修正）より

1905年に阪神電車がこの寺町の北西端をかすめるように開通するが，寺院への影響はそれほど大きいものではなかった。また，今日も11の寺院が存在する。小規模なものではあるが，隣接する尼崎城跡が当時の景観をまったくとどめなくなっている状況と比べると，寺町は辛うじて歴史的景観ということもできる。そのため，寺町は今日では尼崎の観光の一つのシンボルともなっている。

（11）広島

近世には数箇所の寺院集積地区があった（図12）。一つは城の北西に約15カ寺（すべて浄土真宗）が道路を挟んで南北方向に並び，今日「寺町」の公称町名を有する地区（西寺町）である。他の一つは城の南方，今日の平和大通から広島市役所の周辺の地区である（東寺町）。後

者の寺院の宗派は多様である。また戦前までは，これらの他に，現在の平和記念公園からその南方にかけての中島地区にも寺院の集積がみられた（中寺町）。明治維新以後の変化はあまり大きなものではなかったようで，戦前期の各種の市街地図を見ても，これらの寺町はつねに描かれている。

これらの寺町は，すべて原子爆弾の投下により壊滅的な被害を受けたが，その後の動きはそれぞれ異なっている[49]。西寺町は，２カ寺が消滅したとはいえ，寺町の旧来の景観を大きく変えることなく復興がなされたが，中寺町は，戦災復興事業で平和記念公園が設けられたことに伴って，南部のごく一部の寺院を除いて移転を余儀なくされ，また廃絶した寺院もあって，今日では寺町としての姿をまったくとどめない。東寺町はこれらの中間で，平和大通その他の建設が行われたことの影響で寺院の移転等が生じたケースがある一方で，寺院がビルの一部を占めるような事例もみられる。また，現平和大通付近（東寺町の隣接地）にかつて広大な境内地を有していた国泰寺（藩主浅野氏の菩提寺であった）が，1980年に市内西部の己斐地区に移転したことも付け加えておくべき事実であろう。

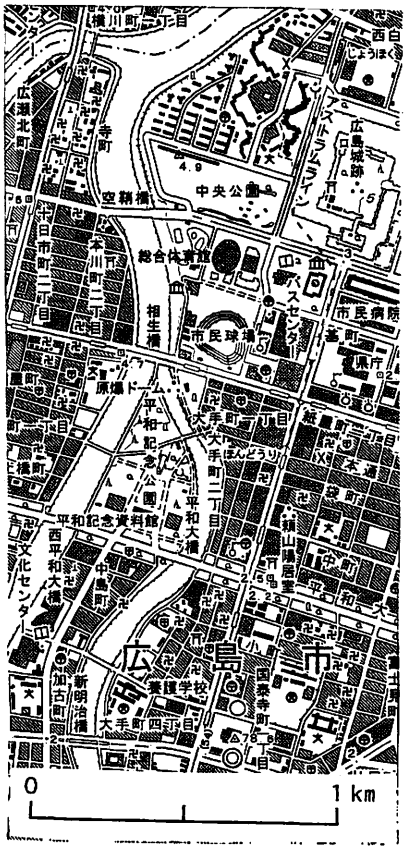

図12　広島の寺町
国土地理院発行2.5万分の１地形図「広島」（2004年更新）より

なお原爆投下が広島の寺院に与えた影響については，新田光子が宗教社会学の観点から論じている[50]。事例とされているのは寺町所在の寺院ではないが，個々の寺院が直面した課題等については共通点が多々あったものと考えられる。

（12）福岡

城と武家屋敷地区をもつ福岡（西部）と町家地区を主とする博多（東部）からなる城下町であり，寺町も両方にあるが，博多の東端部にほぼ南北方向に並ぶもの（図13）の規模が最も大きい。江戸時代のこの寺町の状況を見ると，南部には中世以来ここに立地していたとされる聖福寺や承天寺がそれぞれ広大な境内や門前の宅地を有しており，またその間に配置された妙楽寺もかなりの規模の寺院であった。これらはいずれも臨済宗の寺院である。それに対して，近世城下町形成時に北部の蓮池町（聖福寺境内から100メートル強の距離を隔てる）などに計画的に配置された12カ寺は，どれもそれほど大規模なものではなく，またそれらの宗派は分散的であった[51]。

明治維新直後にどのような変化が生じたかについては，今回明らかにすることができなかったが，1889年にこの寺町の一角，承天寺の近くに九州鉄道の博多駅ができ，翌年にそこから東北方向への鉄道路線が開通した[52]ことは，寺町にもかなり大きな影響を与えたと思われる。この路線は承天寺の境内の一部を通過し，それに伴って承天寺の境内の面積も若干減少した。また1910年代前半に路面電車が開業するようになると，新たに道路を開削してそこに線路を敷設することが行われ，その影響で蓮池町にあった中の2カ寺（明光寺と法性寺）が福岡市の東郊に移転した[53]。

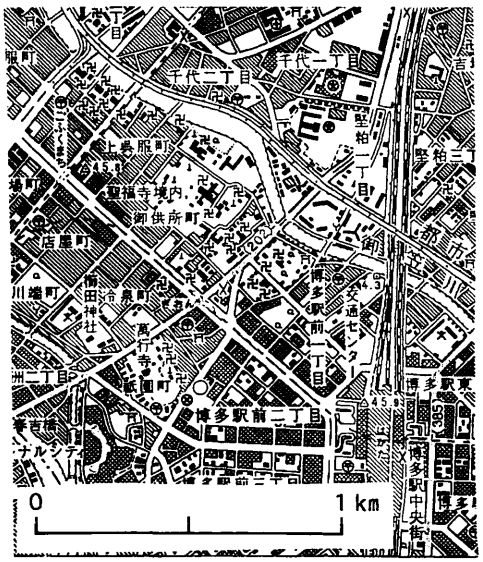

図13　博多（福岡市）の寺町
国土地理院発行2.5万分の1地形図「福岡」（1998年部分修正）より

福岡については，住宅地図に相当するものが早くも昭和初期に作成されている[54]。それによれば，博多地区の寺町の周辺にはかなり多くの商工業者の立地が確認され，それはとくに東南部の（旧）博多駅周辺で顕著である。むしろ，1960年代に行われた鹿児島本線の高架化と関連する路線付け替えの影響もあってか，今日と比べて昭和戦前期の方がよりにぎわっているかのような印象を受ける部分も散見される。

（13）長崎

新潟と同じく幕府直轄の港町で，ここにも寺町が設けられた。近世からの市街地のすぐ外縁に当たる山麓の傾斜変換線付近の2カ所に弧状に寺院群が配置されている（図14）。これら2カ所の寺町を区別して呼称するのに適切な言葉がないが，ここでは今日「寺町」という公称地名をもつ[55]市街地東部の寺町を「東部寺町」，「玉園町」と「筑後町」にまたがる北部の寺町を「北部寺町」と，それぞれ便宜的に呼ぶこととする。

これらの寺町に共通することとして，個々の寺院の敷地は傾斜の方向に沿って細長く伸びていることがあげられる。最も低い部分に沿って門をもち，次に本堂があって，その背後の急斜面の所に墓地が置かれた。19世紀初頭の状況を示すとされる『享和二年肥州長崎図[56]』によれば，東部寺町には16カ寺，北部寺町には8カ寺が確認できる。これらの内，北部寺町の西端の本蓮寺はかつてのキリスト教会の跡地に設けられたものである[57]。そうした例が寺町以外の寺院にもあることを考慮すると，長崎における寺町の設置には，キリスト教信仰を捨てていないかもしれない長崎の住民に対する威圧的効果をねらったものと考える余地がありそうである。2つの寺町とも，市街地の中心部と比べてかなり標高の高い所に位置していることも，そうした効果を強めたのではなかろうか。

長崎については，明治期に何種類かの詳細な市街地図が作られているが，ここでは，寺社の記載が詳しい1885年作成の『改正 長崎港内全図[58]』を用いる。この図には，上記の『享和二年肥州長崎図』に記された24カ寺の内19カ寺が記載されている。残りの５カ寺の内訳は，神社に変わったもの３，寺院自体はあるが異なる名称が記されているもの２である。前者はいずれもかつては境内に神社も祀られていた，いわゆる神仏習合の形態をとっていた寺院のケースで，明治維新期の神仏分離政策の結果，神社となったものである。なお1885年に確認できた19カ寺の内，1977年の地図にも記載されているものは18で，その後の変化は認められない。

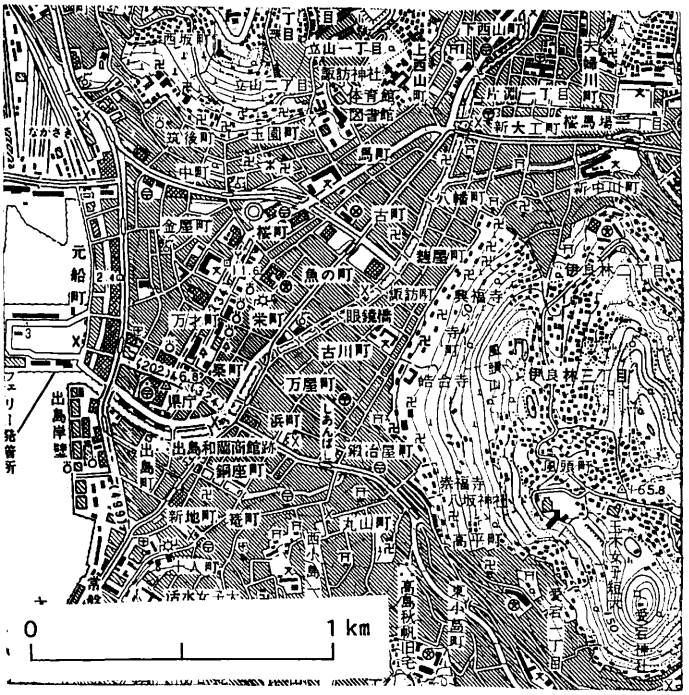

図14　長崎の寺町
日本地図センター発行「地図で見る長崎の変遷Ⅶ」(1999年ごろの2.5万分の１地形図を利用したもの）より

この間の1930年代前半ごろの東部寺町の門前の建物用途利用を示した地図が，武藤長蔵の論文[59]に掲載されている。その調査以後75年以上を経過していることから，個々の建物の用途にはかなりの変化がみられるものの，建物全体の中で何らかの事業を営んでいると判断されるものの占める割合にはあまり大きな増減が認められない。

長崎も広島と同じく原爆に被災した。ただ寺町の被害という点では広島ほど壊滅的ではなかった。焼失したのは北部寺町の西半部に限られ，そこの寺院についてもその後復興を果たした。

３．若干の考察

（１）近代の寺町における強い持続性とその要因

前章においては，13の歴史的都市の寺町について，とくに明治以降の変化の側面に中心をおいて記述してきたが，これら以外の歴史的都市にも多くの場合寺町が設けられ，そしてその大半では今日も存続している。『日本の市街古図』その他の資料[60]から，寺町が近世から現代まで存続していることが確認できる都市を北から順に列挙すると，以下のようになる。

松前，盛岡，仙台，山形，米沢，鶴岡，福島，佐倉，東京，小田原，新発田，高岡，福井，小浜，静岡，岐阜，高山，津，桑名，上野（伊賀市），(西)舞鶴，福知山，宮津，堺，岸和田，姫路，明石，洲本，和歌山，新宮，鳥取，松江，岡山，福山，高松，丸亀，徳島，今治，久留米，柳川，佐賀，唐津，島原，中津。

以上から，日本の多くの歴史的都市において，江戸時代以来今日に至るまで，寺町と総称される仏教寺院の集積地区が存続してきたという事実が明らかとなった。寺町の形成要因については本稿の直接の課題とするところではないが，明治以降，とりわけ明治維新から敗戦前後までの時期，つまり近代における寺町の持続性の要因としては，どのようなものが想定できるであろうか。

この点に関して，経済地理学が商店街（多くの商店が，ほとんどの場合自然発生的に集積した地区）や工業団地（工場が計画的・政策的に集積した地区）の成立・存続要因を説明するのにしばしば用いる「集積の利益」という概念は適用可能であろうか。筆者はこれについてはかなり否定的である。寺院が集中して立地することには，寺院の側にとっても，あるいは壇信徒の側にとっても，何らかの経済的利益があるとは考えられないし，経済以外の面におけるメリットも簡単には思い浮かべることができない。一方，いったん成立したある事象が長く続くことに対して，「歴史的慣性」という表現で説明しようとすることがしばしばあるが，これは悪くいえば一種の「逃げ」であり，歴史学研究[61]においては，そうした「逃げ」は許されるものではなかろう。

日本の多くの歴史的都市において寺町が近代期に存続したことの要因，少なくとも諸要因の中の一つとして，現時点で筆者が考えるのは，寺院境内地の土地所有制度の在り方である。この点についてはかなり複雑な経緯があるようで，安易に単純化することには問題も生じうるが，あえて単純化していえば，長い歴史をもつ寺院の多く（必ずしもすべてではなかったようであるが）は，明治初期の政府の宗教政策と土地制度改革との絡みの中で，それらの境内地が国有地に編入され，それらの寺院はそこで宗教活動を営み続ける限りにおいて国から無償で境内地が貸与されるという制度が採用されたということになろう[62]。こうした制度の下では，個別の寺院による移転の自由は，事実上著しく制限されていたといわなければならない。この他に，ほとんどの寺院が境内に墓地を有していたという点も，寺院の移転を困難にした条件として指摘することができるであろう。

寺院境内地の寺院への譲与は，すでに戦時期から始まっていたが，戦後，とくに日本国憲法成立後，その中に含まれる国家の宗教的中立保持規定との関係で，国有地の無償貸与という形での寺院境内地の取り扱いは，早急に解消することが求められ，1949年ごろから53年ごろにかけて，一応の決着をみた。具体的には，明治維新期あるいはそれ以前から宗教活動を営んでいた事実が確認できれば，その寺院は境内地を国から譲与（一部の寺院については払下げ）されたのである。これ以後，各寺院にとっての立地の自由度は著しく増大したということになる。

（2）寺町のなかった（なくなった）歴史的都市

以上縷説したように，日本の歴史的都市の大部分には寺町が存在したが，ある程度以上の規模を有した歴史的都市においても，近世の絵図や今日の地形図などから寺院の集積地区を容易には見いだしがたいケースも皆無ではない。そうした事例として，ここでは高知，鹿児島の2都市を取り上げる。

高知　高知の寺町の歴史はかなり複雑である。島田豊寿[63]および小林健太郎[64]によると，17世紀後半の寛文期には寺町は城郭西方の小高坂地区のみにあり，他の寺院は城郭東方の町屋地区（下町）内に散在していた。その後，1698（元禄11）年の火災で下町の寺院の多くが焼失したため，その復興過程で下町の東端に新寺町が形成されたものの，1707年の地震によりそこの寺院は四散し，一部は小高坂地区（ただし以前からの寺町とはやや離れたところのようである），他は高知城下町の南を区切る鏡川の南の潮江村に移転した。こうして近世後期には3カ所に寺町が存在したのであるが，明治以後の地図では，小高坂地区の寺町は2カ所とも姿を消し，跡地は旧制中学や師範学校の敷地として利用されることとなった。潮江地区には今日もなお若干の寺院が存在するが，寺町というにはあまりにも少ない数である。高知の中心市街地全体をとっても，今日見られる寺院の数そのものが，他の同程度の規模の都市と比べてかなり少ないように思われる。

鹿児島　近世の絵図[65]にも寺町と称するに値するような寺院集中地区は描かれていない。ただ，いくつかの大規模な寺院があり，その中には大乗院のように境内に多くの塔頭を有するものもあった。明治維新時に，これらの寺院の多くは廃寺となり，その後，江戸時代には薩摩藩の政策により禁じられていた真宗の寺院も含めていくつかの寺院が新設されたが，今日でも複数の寺院が集中的に立地する地区は存在しない。

以上の2都市は，いずれも明治維新時の廃仏毀釈運動がきわめて強硬な形で行われた所として知られている。高知において近世にはあった寺町が明治以後見当たらなくなっていることは，その事実との関係で説明できるかもしれないが，鹿児島のようにもともと寺町が存在しなかったと思われるケースについては，廃仏毀釈運動との関係だけでは理解できない。おそらく鹿児島においては，薩摩藩独自の外城制との関係もあり，鹿児島城下町の地域制が城下町の一般的な在り方とはかなり大きく異なっていたのではなかろうか。

これら2都市の他，近世のある時期までは寺町が存在したにもかかわらず，今日，寺町の存在を確認できない都市として，水戸の例をあげることができる。金田章裕[66]が『水戸市史』などに基づいて記すところによると，17世紀後半の寛文年間に藩主となった徳川光圀によって大規模な寺院整理が行われ，その結果，それまで城下町北西端にあって21カ寺を擁した寺町は7カ寺を残すのみとなり，それらも今日では姿を消している。また大分の場合は，近世の城下絵図[67]に「寺町」と記される地区は存在したが，そこの寺院数はごくわずかで，他の寺院は城下町周辺部などに分散していた。また熊本のように，寺院が若干集中する地区もある一方で，正

方形街区をなす町人町の各街区の中央部に寺院を配するという，興味深い寺院配置を示す城下町もあった。

さらに，都市の存立基盤そのものが有力寺社の存在にあるような都市（長野・伊勢・奈良・琴平など）においては，本稿で扱ったような意味での「寺町」の存否を云々すること自体が不適切というべきであろう。

以上から明らかなように，寺町はすべての日本の近世都市に存在したわけではない。しかし，存在しなかったケースはあくまでも少数派であったと考える。

4．むすびにかえて

以上，本稿においては，まず寺町についての研究史の概略をたどりながら本稿の課題を設定し（第1章），次いで今日もなお寺町が都市内部で明瞭な形をとって存続している13の歴史的都市（必ずしも城下町には限らない）をとりあげて，明治以降の変化・不変化の問題を中心として個別に寺町の概況を紹介した（第2章）。その上で，近代期における寺町の存続要因について筆者の見解を述べる（第3章第1節）とともに，今日寺町が明瞭な形では見られない（つまり少数派と考えられる）若干の事例についての紹介をも行った（第3章第2節）。

ここでは以上の論述の結果を繰り返すことは避け，本稿において論じることができなかった若干のテーマについて，今後の見通しを記すこととする。

まず第一には，この寺町，より一般化していえば宗教施設の集中地区という存在が，はたして日本特有のものかという点についてである。第1章で紹介した豊田　武の書物には，秀吉による寺院集中政策について，宣教師が宗教界の世俗権力への完全な屈服と評価したことが記されている[68]。宣教師の目にそう映ったということは，言外に，キリスト教世界ではそうしたことは（少なくとも当時までは）なかったということを示唆している。筆者はヨーロッパの都市について，それほど豊富な知識・経験を有しているわけではないが，地形図や市街地図を見るかぎりでは，ヨーロッパの歴史的都市においてキリスト教の教会や他の宗教施設が固まって立地している地区はまずなさそうである。またイスラム教世界やヒンドゥー教世界については，ヨーロッパのキリスト教世界よりもさらにわずかな知見しかもたないが，それでも，都市内部に宗教施設が集中している地区を地図上で見いだしたことはない。同様のことは，東南アジアの仏教国の都市についても言える。「存在しない」ということの証明は，「存在する」ということの証明に比べてはるかに難しいので，ここで断定することは差し控えるが，寺町という存在はあるいは世界的に見ても希有のものであるのかもしれない。

二番目に，今回の研究を遂行する過程で，筆者が従来行ってきた近代の北海道における都市形成・発達に関する研究や，同じく近代日本の都市図に関する研究において得られた資料あるいは知見とも併せ考えた結果，明治期になってから都市形成が行われた北海道の都市の一部に

おいて，小規模な寺町が計画された事例があるのではないかという見通しをもつに至った。この点は，従来まったく指摘されていないことと思われ，もし事実とすればかなり興味深いことである。しかし，今回の研究計画の中では北海道への現地調査はまったく予定していなかったため，未だ見通しの段階に止まっている。

以上，若干の課題を今後に残しつつ，本稿を閉じることとしたい。

注

1）大類　伸『城郭之研究』日本学術普及会，1915.

2）小野晃嗣「近世都市の発達」（国史研究会編『岩波講座 日本歴史』岩波書店，1934 所収）

3）豊田　武『日本の封建都市』岩波書店，1952.

4）原田伴彦「近世都市と寺町」（永島福太郎先生退職記念会編『永島福太郎先生退職記念 日本歴史の構造と展開』山川出版社，1983 所収）

5）小葉田亮「旧城下町景観」地理論叢 7，1935.

6）佐藤甚次郎「近世の都市」（森鹿三・織田武雄編『歴史地理講座 3 日本』朝倉書店，1957 所収）

7）中西和子「城下町における寺院配置―寺町の防御機能の再検討―」（奈良女子大学）人間文化研究科年報 14，1999.

8）山近博義「近世後期の京都における寺社境内の興業地化」人文地理 43-5，1991，同「近世京都における寺社地と市街地形成」奈良女子大学文学部研究年報 37，1994，同「文学作品にみられる近代盛り場―明治・大正期の京都新京極の場合―」地理学報 31，1996 など。

9）山田朋子「都市の近代化における「盛り場」の位置付け―名古屋の事例から―」大阪大学日本学報 13，1994，同「盛り場に住む人々にとっての「近代化」―大正・昭和初期の名古屋市大須―」待兼山論叢（日本学篇）28，1994，同「名古屋大須の盛り場構想の変遷―昭和初期の新聞座談会の役割―」大阪大学日本学報 16，1997.

10）加藤政洋「盛り場「千日前」の系譜」地理科学 52-2，1997 も墓地を含む寺院境内の遊興空間化を扱ったものであるが，ここの場合は寺町所在の寺院ではないので，ここではふれない。

11）河端しのぶ・藤田勝也「近世福井城下における寺町・寺院集積地の景観形成と地域性」（福井大学地域環境研究教育センター）日本海地域の自然と環境 9，2002.

12）千葉一輝・戸沼幸市「近代以降における寺院集積の変容について―東京の寺院集積地区（寺町）に関する研究　その１―」日本建築学会計画系論文集 491，1997など。

13）佐藤圭二・南谷孝廣「近代都市計画における寺院空間の扱いについて―特に名古屋市戦災復興土地区画整理事業を中心として―」日本建築学会東海支部研究報告集 35，1997.

14）野中勝利・佐藤　滋「近世城下町を基盤とする地方都市の近代都市づくりに関する研究―その６　旧城郭と寺町にみる近代最初の都市計画地域―」日本建築学会大会学術講演梗概集（東海），1994.

15）佐藤　滋『城下町の近代都市づくり』鹿島出版会，1995.

16）各種の日本史辞典や地理学辞典での「寺町」の扱われ方を見ると，約半数の辞典に立項されており，その場合「城下町に形成されたもの」という前提で記されているケースがほとんどである。城下町に多かったことは事実であるが，次章で記すように新潟や長崎といった港町にも寺町が存在したことを考えると，多少疑問が残る。

17）弘前の寺町については，東北工業大学草野研究室編『弘前の寺院街（１.茂森禅林街）―弘前市伝統的建造物群保存調査報告書―』同研究室，1985が詳しい。なお，こうした報告書の刊行にもかかわらず，弘前の寺町地区は今日に至るまで「伝統的建造物群保存地区」の指定を受けるには至っていない。

18）秋田在住の富樫要吉によるもので，「新編 弘前市史」編纂委員会編『新編 弘前市史資料編 5（近・現代

編 2)』弘前市企画部企画課，2002 の付録として復刻されている。原図の所蔵機関は明記されていない。

19) 記念誌作成委員会編『鏡ヶ丘百年史』弘高創立百年事業協賛会，1983.

20) 近世における寺町の寺院数については，秋田市編『秋田市史 3 近世通史編』秋田市，2003 所収の表（寛文 3 年寺町に存在する寺院）による。現在の寺院数はゼンリン社の住宅地図による。

21) 明治期に避病院が寺院境内に設けられたのは，秋田に限ったことではない。京都では大徳寺（上京）と東福寺（下京）に避病院の置かれたことが知られている。

22)『秋田市史 昭和編』秋田市，1967.

23) 渡部景一編著『秋田市歴史地図』無明舎出版，1984所収。

24) 三浦鉄郎「地位層からみた秋田市の歴史地理学的研究」あきた史話一歴史論考集 2，1989.

25) 横尾 実「秋田における都市構造の歴史的再編」人文地理 45-3，1993．なお関連する論文として，横尾「城下町秋田の地域形成様式」東北地理 43-1，1991がある。

26) 残象とは，地理学者田中啓爾（1885-1975）の提唱した用語で，地域にみられる景観・機能を，初象，顕象，残象のいずれに属するかを分類する際に用いられる。あるいは初象の前段階として未象，残象からさらに時間が経過した場合の消象が加わることもある。三浦の論文の表題に用いられている「地位層」も同じく田中によるものである。

27) 前掲25）人文地理掲載論文。

28) 幕末に近い1849年の新潟の状況を描いた鳥瞰図『嘉永二年新潟真景』（原田伴彦・西川幸治編『日本の市街古図一東日本編一』鹿島出版会，1973所収）には，ここで問題としている地区に「御役宅」の文字が 9 カ所も記されている。

29) 新潟市歴史博物館内のミュージアムショップにおいて購入した復刻図による。同図には復刻主体は明示されていない。

30) 渋谷俊彦「都市における社寺領域の研究 16 新潟市西堀地区の寺院群」日本建築学会中国支部研究報告集 20，1997.

31) 渋谷（前掲30）は「1995年 3 月の調査時点では，郊外への移転により廃寺になっていた」と記すが，ここでの廃寺という用語法については，やや疑問がある。

32) 田中 正『越後高田 親藩城下の寺町寺』北越出版，2002.

33) 渋谷俊彦「都市における社寺領域の研究 15 富山市梅沢地区の寺院群」日本建築学会中国支部研究報告集 20，1997.

34) 富山郷土博物館蔵。同館により1997年に複製されたものを利用した。

35)「角川日本地名大辞典」編纂委員会・竹内理三編『角川日本地名大辞典 16 富山県』角川書店，1979.

36) この他に，城の東南方の小立野台地にもいくつかの寺院の集積が見られるが，ここでは省く。

37) 本康宏史「「軍都」金沢と地域社会一軍縮期衛戍地問題を中心に一」（橋本哲哉編『近代日本の地方都市一金沢／城下町から近代都市へ一』日本経済評論社，2006 所収）

38) 小坂謙介・山田幸正「金沢寺町寺院群における境内地環境にみられる変容実態とその背景について」日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）2010.

39)『太陽コレクション 地図 江戸・明治・現代 4 中山道・奥州道』平凡社，1977 付録.

40) 前掲39)

41) 山田，前掲 9 ）

42) 佐藤・南谷，前掲13)

43) 山近博義，前掲 8 ）の諸論文。他に関連する論文として，大槻洋二「京都・新京極の成立母胎としての寺町一伝統都市の近代における歓楽街形成に関する史的研究 その 1 一」日本建築学会計画系論文集 514，1998 があるが，先行する山近の研究にまったくふれていないのは疑問である。

44) 碓井小三郎の編になる書物で，1916年に『京都叢書』の一部として刊行された。ここでは『新修京都叢書』に収められたものによった。関係箇所はその第20巻（1970）収録分である。

45) これら２種の古地図については，佐古慶三編『古版大坂地図集成』清文堂出版，1970 に復刻されているものを利用した。
46) 北尾鎌之助『近代大阪（近畿景観 第３編)』創元社，1932（1989復刻)．
46) 扇田　信・足達富士夫・住田昌二・梶浦恒男・石東直子・町田玲子・吉原崇恵・勘田加津代「大都市の景観問題に関する研究 その２ 大阪市における寺町地区の土地利用変化」日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）1968.
48)『尼崎の社寺建築物―尼崎市文化財調査報告書 31―』尼崎市教育委員会，2002には尼崎の寺町の形成に関して詳しい記述がある（青山賢信執筆）が，明治以降の変化についてはほとんど記されていない。
49) 堤　正信「第Ｉ章 都市文化の基盤 第３節 復興した都市空間」（広島市編『広島新誌 都市文化編』広島市，1983 所収）
50) 新田光子『原爆と寺院―ある真宗寺院の社会史―』法蔵館，2003.
51) 福岡の古地図と現状の対比を行った書物として，宮崎克則・福岡アーカイブ研究会編『古地図の中の福岡・博多―1800年頃の町並み―』海鳥社，2005がある。
52) この鉄道は基本的には現在のＪＲ鹿児島本線に引き継がれるが，寺町付近を含む博多駅付近の路線は，1960年代に付け替えが行われ，そのこととの関連で（新）博多駅周辺の土地区画整理事業も行われた。
53) 柳 猛直『福岡歴史探訪 博多区編』海鳥社，1993.
54) 銀洋社が数度にわたって発行した『福岡市縦横詳細地図』がそれで，ここでは福岡県立図書館に所蔵されている第９版（昭和13年版）のコピー本を利用した。
55) 一部の寺院は他の町にある。
56) 長崎文献社による復刻図を用いた。
57) 布袋　厚『復元！ 江戸時代の長崎―博物館に残る絵図のかずかずを現代地図上に集大成―』長崎文献社，2009.
58)『太陽コレクション 地図 江戸・明治・現代 3 西海道・南海道』平凡社，1977 付録.
59) 武藤長蔵「長崎の寺町」社会経済史学 3-11，1934.
60) 原田伴彦・西川幸治編『日本の市街古図 西日本編』鹿島研究所出版会，1972，同編『日本の市街古図 東日本編』鹿島研究所出版会，1973に加えて，藤岡謙二郎監修，藤本利治・矢守一彦編『生きている近世 1 城と城下町』淡交社，1978，藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』柳原書店，1983などを利用した。
61) 筆者の専門分野である歴史地理学は，地理学（人文地理学）の一分野であると同時に，広義の歴史学の一分野としての性格も併せもっている。
62) この点に関して主に参考にしたのは，大蔵省管財局編『寺社境内地処分誌』大蔵財務協会，1954である。
63) 島田豊寿「高知―土佐国高知城下町絵図―」（原田伴彦・西川幸治編『日本の市街古図 西日本編 解説』鹿島研究所出版会，1972所収）
64) 小林健太郎「水を制した城下町―高知―」（藤岡謙二郎監修，藤本利治・矢守一彦編『生きている近世 1 城と城下町』淡交社，1978所収）
65) 塩満郁夫・友野春久編『新たな発見に出会う 鹿児島城下絵図散歩』高城書店，2004.なお本書は，1859年ごろ作成されたと推定されている『旧薩藩御城下絵図面』（鹿児島県立図書館蔵）の内容を詳細に読みといたものである。
66) 金田章裕「水戸」（藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』柳原書店，1983所収）
67)『清水流規矩元法分間絵図』（『太陽コレクション 地図 江戸・明治・現代 3 西海道・南海道』平凡社，1977所収）なお，この図は1802（享和２）年に作成されたものである。
68) 豊田，前掲３）